（ 続紙 1 ）

京都大学	博士（　人間・環境学　）	氏名	張　哲　僥
論文題目	四川南部における宋朝の開拓政策と統治體制		

（論文内容の要旨）

本学位申請論文は、宋朝（10世紀後半～13世紀後半）の辺境統治が、四川南部とりわけ岷江（長江の支流）南岸地域においてどのようなプロセスを経て拡大していったかを詳細に解明しようと試みた論考である。

これに先立つ唐の時代（7世紀～10世紀初頭）、この地域では王朝による間接統治（部族長を形式的に地方長官に任命する「羈縻統治」）が行われていたが、元代（13世紀後半～14世紀半ば）以降は州府・県による直轄統治が行われるようになった。すなわち、本論文で取り上げる宋代は、この地域に対する王朝統治のあり方が大きく変化する時期なのであり、本研究の意義はその変化の過程を実証的に解明しようとする点にある。

序論では、まず四川南部の地理的・社会的環境を概観し、この地域が高温多湿ないわゆる「瘴癘の地」であり北方の人間にとっては住みづらい土地であったこと、王朝が専売の対象とした塩を産出したこと、先住民として烏蛮と僚人（獠人）がいたこと等が、地域の特徴として述べられる。その上で、宋朝の辺境統治に関する主要な先行研究を紹介し、この地域を対象とした研究が手薄であること、にもかかわらず、解決すべき問題がいくつも存在することを指摘して、宋朝による四川南部地域の開拓・統治の背景や統治体制の実態を解明する必要性を説く。

第1章では、10世紀半ばに成立した宋朝が、11世紀初頭の真宗時代になってこの地域の開拓に着手した経緯、開拓に伴って勃発した先住民との対立・抗争と宋朝側の対応、抗争終結後の宋朝の統治体制について論じられる。岷江を遡上して南進した宋朝は、支流の悦江流域の塩資源（塩井）をめぐって先住民から激しい抵抗を受け、その鎮圧のために西北辺境の陝西から禁軍（正規軍）を投入した。陝西禁軍を西南辺境に投入し得たのは、この時期、北方の遊牧勢力である契丹・党項と宋朝との間に講和が成立したことによる。宋朝は統治の拠点として淯井監を置き、防御施設を建設して塩資源の確保を図る一方で、先住民との交易を積極的に行いその安撫に努めた。

第2章では、11世紀後半の神宗時代における宋朝の統治領域拡大の具体相が明らかにされる。宋朝が淯井監からさらに南進して統治領域の拡大を試みると、僚人・烏蛮との間に紛争が発生した。この際、陝西禁軍とともに宋朝軍の戦力となったのが瀘州義軍である。王安石が実施した保甲法にもとづき、四川南部の拠点都市瀘州では、宋朝に服属した僚人が隣保組織に組み込まれ、部族の枠を越えて「指揮」（500人隊）に編成された。宋朝はこれらの兵力によって「省地」（直轄領）を拡大させたが、密林の奥に居住する烏蛮を屈服させるには至らなかった。その結果、省地に組み込んだ僚人に対しては、納税の義務を

課した一方で、烏蛮に対しては部族長を介して間接的な統治を行うにとどまった。

第3章では、11世紀末の徽宗時代における統治方式の変更と、「帰明人」（帰化した先住民）に対する管理制度とについて述べられる。部族に応じて統治方法を使い分けた神宗時代とは異なり、徽宗時代の宋朝は、王朝に帰順した先住民に土地を献納（「納土帰順」）させ、そこに州・県を設置して直轄統治を行った。帰明人は籍帳に登録して管理した。しかし、州県の増置は行政コストの増大を招く結果となったため、やがて州県の官署を削減したり城塞（防御施設）に降格するなどの対応を余儀なくされた。

第4章では、北宋末期から南宋中期に至る時期（12世紀）におけるこの地域の統治状況について、軍事体制に着目して論じられる。悦江上流域に住む先住民の卜漏が12世紀初頭に起こした反乱は、この地域における宋朝の軍事体制の脆弱さを露呈した。反乱を鎮圧するため、西北辺境からの精鋭部隊が投入され、反乱はおよそ1年後に平定された。そののち宋朝は、この地に軍政を敷き、治安の回復に努めた。義軍に加えて、先住民を徴募して民兵組織（「勝兵」）が編成された。北宋滅亡から南宋中期にかけての時期、この地域では、待遇への不満を動機とする禁軍兵士の反乱が発生するが、軍乱を鎮圧するために、現地軍に加えて四川北部から「御前大軍」（対金国境の防衛軍）が投入された。その後も、財政的余裕の乏しいこの地域の治安を維持するために、御前大軍による牽制が必要不可欠となった。

結論では、以上4章にわたって述べてきた内容をまとめるとともに、今後に残された課題――すなわち、宋朝の辺境統治の本質を理解するために、今回取り上げた四川南部のみならず、今後は、四川西部・荊湖路（湖南）・広南西路・広南東路・福建などにおける宋朝の辺境統治のあり方を比較検討してゆかねばならない――が述べられ、論文を締めくくっている。

（続紙　２　）

（論文審査の結果の要旨）

本学位申請論文は、11世紀初頭から12世紀にかけての四川南部における宋朝の開拓政策と統治体制の整備がどのように進展していったのかについて、岷江南岸地域を中心として詳細に考察した論考である。

関連する史料を丹念に集め、それらを緻密に分析してゆく研究手法は、オーソドックスではあるが堅実であり、高く評価できる。また、中華王朝が周辺の諸勢力・諸民族をいかにして自らの統治下に組み込んでいったのか、そのプロセスを解明することは、現代の政治・社会を理解・分析する上で大いに参考となり得ることからも、本論文の研究課題は意義あるものであると言えよう。

従来、中国王朝の辺境経営・統治に関する研究は、北方遊牧民の活動領域であった北方辺境・西北辺境を対象に選んで行われることが多く、幾多の研究成果が蓄積されてきた。北方遊牧民の動向が歴代中国の政治・社会に多大の影響を及ぼし、その結果、両者の間には濃密な関係が築かれ、それを記した史料も比較的豊富に残されているのが、その一因であろう。それに対して、本論文で研究対象として扱われる西南辺境は、その重要性に比して、豊かな研究成果が積み上げられてきたとは言い難い。その意味において、本論文はこれまでの研究史の状況に一石を投じるものであり、貴重な研究成果であると言える。

四川南部は古来、多くの非漢民族が居住していた地域である。唐代までの諸王朝は、統治を目的として彼らの居住する地域に深く足を踏み入れることなく、部族長を形式的に地方長官に任命する方式により間接的に先住民を統治してきた。「羈縻」とよばれるこの統治方式が大きく変貌するのが宋代である。本論文では、中国王朝側が残した文字資料に拠って、宋朝がどのような手法によって先住民の住む四川南部地域に開発の手を伸ばしていったか、先住民との間で勃発する争いにいかにして勝利し統治体制を確立していったのかが、詳細に解明されている。典籍を中心に文献を博捜して関係史料を見出し、その内容を分析して複雑な事実を詳細に解き明かしたことは、本論文の大きな功績である。

広い視点に立脚した議論が展開されている点も、本論文の優れた点として評価できる。北宋前期、宋朝が多大の犠牲を払ってこの地域の統治を維持するため、拠点となる淯井監を設置した背景には、当時の中国における専売塩の不足があったこと、のちにこの地域における防衛力が削減された一因に、全国的な塩の増産とそれに伴う販売価格の低下が考えられること等を指摘しているのは、その一例である。

以上のように、本論文は、従来の先行研究には見られぬ斬新な視点を提示している

のであるが、荒削りな点や不足している点もいくつか存する。たとえば、宋朝がこの地域を開拓する際に「先住民」との紛争をしばしば起こしているが、本来複数の部族を含むはずの先住民の実態について、本論文で正面から取り上げられることはない。無論それは、王朝側から見た記録に先住民に関する詳細な記録が少なく、また、先住民側の記録がほぼ見当らないこと等の理由からであろう。だが、宋朝に対峙する先住民の見え方が、章によって異なる（濃淡がある）のは気になるところである。たとえそれが史料記述の相違に拠るものだとしても、丁寧な説明がほしいところである。また、四川南部における宋朝の統治体制が、宋朝の辺境統治全体で見た場合にどのような特徴を有していたのかについての言及が手薄であった点も残念であった。今後の課題としてほしい。

　些か望蜀の言を述べたが、中国王朝の辺境経営史を通観する上で、先行研究の欠を補う本論文の有する意義は大きい。今後、宋朝の辺境経営全般を視野に入れて研究を拡充させることができれば、より大きなインパクトを持つ研究となることが期待される。

　以上、審査したところにより、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、令和6年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

要旨公表可能日：　令和　　年　　月　　日以降